

世界の文書館

小川千代子著
岩田書院 2000.5
125p 19cm 1,400円

岩田書院が刊行を続けている文書館ブックレット・シリーズの5冊目であり、著者の小川氏自身、第1冊『情報公開の源流』について2冊目となる。書名のとおりに、ヨーロッパ、アメリカ、中国、アジア・太平洋地域、アフリカ、と5章にわたって世界の文書館を紹介し、論じた本である。著者自身は、「国立の文書館を中心に、筆者のこれまでの訪問調査の結果を交えて世界各地の文書館の情報を様々な角度から取り上げた。いふなれば、「文書館」という共通項で、広く世界を見渡そうというのが、本書の目的である」と、刊行の目的を記している。また、その成立の経緯については、1996年6月に行った学習院大学総合講義「記録保存と現代」中の「世界のアーカイヴズの現状」講義資料をまとめて書き下ろしたものと、小川氏がこれまでに発表した諸外国の文書館に関する文章を組み合わせ、とされている。

小川氏は、運営委員会国際担当、国際交流委員会副委員長と、常に全史料協の国際交流活動を推進してきた。もちろん、本務であった国立公文書館、そして現在の国際資料研究所の活動においても同様であり、多くの国の文書館を訪ね、多くの国際会議に参加し、多くの来日アーキビストを迎えてきた。そのなかで得られた貴重な情報は、その折々に積極的に提供され、私達はそこから諸外国の情勢を知る恩恵に浴してきた。小川氏を含めた海外文書館に関する文献は、『文書館学文献目録』（全史料協関東部会編、1995年、岩田書院。縮刷版及びCD-ROM版で2000年再刊）にまとめられて一覧しやすくなったものの、1冊で全世界的に展望できる著作はなかっただけに、本書刊行は貴重なものとなった。

もちろん、前述のような成立経緯であることから、小川氏自身が「なかには、古い情報もあります」と断っているような部分はあろう。また、いかな小川氏といえども、全世界の文書館を実見することは困難であり、国や地域によってボリュームや精度に差はある。しかし、実見した国のみを詳細に収録するというよりも、そうでない国や地域についても、日本で紹介されている現状範囲によって（参考文献が明示されている）、全世界的にカバーするという編集方針は、本書の性格からすれば当を得ていると思われる。

小川氏は、1996年と1999年に同様のテーマで行った前述学習院大学の講義を比較し、96年には「文書館の建物や組織の様子を説明することに終始した」のに対し、99年には「記録管理システム、記録管理権限などの重要性を強調しつつ、各国の文書管理がどのように行われ、それが文書館の業務と役割にどう反映されているかを説明する内容へと論点が移ってきた」と記している。このことは、海外の文書館情報に私達が求めている内容の変化としても同様であろう。「情報公開法」制定と、それにもなう文書管理制度の整備、国立公文書館法の制定と利用規則の改正という一連の国の動きは、多くの都道府県における情報公開条例の改正と文書管理システムの改正、文書館公開システムの見直しへと及んできている。市町村においても同様であろう。その際、私達が参照とすべき制度事例は、日本のナショナル・アーカイブズにとどまるものではなく、諸外国の制度に及ぶ。そして、その情報は移管のシステム・権限、公開猶予期間の設定方法、公開基準など、現用段階の文書管理、情報公開制度・個人情報保護制度と一連の情報でなければ大きな意味をなさなくなっている。これは小川氏が「補章 21世紀を前に」を書き下ろして警告している「電子記録の時代」という課題に対しても同様である。

そのためには、小川氏ひとりに頼ることなく、多くの海外情報が時々刻々と紹介されて

いくことが求められる。幸い、最近は大規模自治体の文書館訪問記や、海外在住者による報告など、様々な国、様々なレベルの紹介もなされるようになってきている。それら最新の海外情報を集めて編集する形で、「世界の文書館」は、No.2, No.3と継続刊行されることも期待されるテーマである。

私自身の視野の狭さのため、文書館の世界に引きこもった紹介しかできず、小川氏が本書に意図された「文書館をモノサシとした比較文化論」には全く言及できなかった。具体的な各国・地域の内容とともに、本書を一読いただければ幸いである。

太田富康・埼玉県立文書館